

研究紀要

第 113 集

5年が経過した「トライやる・ウィーク」の教育的効果……………	1
ー自己効力感・勤労観の心理学的アプローチからー	
古田 猛志 住本 克彦 定金 浩一	
中学校音楽科における和楽器の指導に関する研究……………	7
山本 茂之	
学習指導に生かす評価の在り方……………	15
安達 佳徳 住本 克彦 八木眞由美 上月 啓輔・東 智之 山口 豊	
理科嫌い・理科離れに関する意識と理科研修の在り方に関する研究……………	25
ー児童生徒および教員を対象とした調査をとおしてー	
一山 秀樹 安達 佳徳 岡田 学	
小・中・高等学校 連携でつくる「総合的な学習の時間」に関する研究……………	35
ー評価の視点を明確にした連携の在り方を考えるー	
上月 啓輔 山口 豊	
体験活動の及ぼす影響と今後の方向性に関する一考察……………	43
ー「トライやる・ウィーク」等体験活動の成果と課題を踏まえてー	
東 智之	
学校評価についての一考察……………	51
山内 裕文 樋口 正和	
アクション・リサーチによる教授者の内的変化と授業改善の検証……………	61
ー現職教員研修をとおしてー	
泉 恵美子	
教職員の情報モラルに関する実態調査の分析と研修用コンテンツの開発……………	69
常陰 則之 白石 守 岡本 育夫 奥田 誠治	
沖田 雅一 野村 元幸 山根 文人	

平成 15 年 3 月

兵庫県立教育研修所

はじめに

平成12年12月に新しい学習指導要領が告示されました。新しい教育課程の基準は小・中学校においては今年度から実施され、また、高等学校については来年度から実施されることになっています。新しい学習指導要領においては、完全学校週5日制の下、各学校が「ゆとり」の中で特色ある教育を推進し、生徒に豊かな人間性や自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成を図ることを基本的なねらいとしています。

このような教育の大きな変革期にあって、当研修所においても、社会の動きや教育を取り巻く現状を踏まえ、今日的な教育課題の解決に向けて、所員一人一人が調査・研究を行っています。そのうち、本紀要にはグループ研究6編、個人研究3編をまとめました。これらの研究成果が各学校の教育実践に役立つことを祈念しています。

本研究について、率直なご批評、ご指導をお願いいたしますとともに、これまでの調査、研究にご協力いただきました皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成15年3月

兵庫県立教育研修所長

田 寺 和 徳

5 年が経過した「トライやる・ウィーク」の教育的効果

－自己効力感・勤労観の心理学的アプローチから－

心の教育総合センター

企画調査課 主任指導主事 古田 猛志

義務教育研修課 指導主事 住本 克彦

高校教育研修課 指導主事 定金 浩一

要 旨

本研究では、心の教育総合センターで実施した「トライやる・ウィーク」に関する心理学的調査をもとに、自己効力感・勤労観の視点から、この体験が生徒にどのような影響を与えてきたかを研究した。調査では、平成10年度の調査との比較から言えば、過去には変化が見られた体験前から体験後にかけての自己効力感に本年度は有意な変化が見られず、同様のことは勤労観の下位因子である自己実現、社会的自己実現にもあてはまる。しかし、過去と比べて社会的ステータスには大きな変化が見られた。これらを考察し課題を明らかにした。

1 問題および目的

県下の中学2年生が地域で学ぶ1週間の社会体験学習「トライやる・ウィーク」は、本年度で5年目の実施となった。この体験活動は「生きる力」を育成することを主な目的として導入された。

心の教育総合センターでは、この体験活動を心の教育の先駆的プログラムとして捉え、その教育的効果を測定してきた。調査では、自己効力感、勤労観、個人志向性・社会志向性の三つの指標を用いた。自己効力感是自己に対する自信の基礎をなすと考えられ、勤労観は中学生なりの労働に対する考えを表し、個人志向性・社会志向性は人間の発達を個性化と社会化の2領域から測定するものである。これまでの研究成果^{1) 2)}から次のようなことが明らかになった。

自己効力感はこの体験の1週間で高まる。自己効力感の一般化（ある課題達成において形成された自己効力感他課題達成においても役立つ）の特性から、中学生が単に社会的に体験した領域において自信を深めたというだけでなく、他の課題達成にも自信を深める可能性を示唆するものである。

勤労観では、職場人間関係の下位因子には変化が見られなかったが、自己実現、社会的自己実現、社会的ステータスの下位因子には変化がみられた。中学生が自己と現実の職業を相対的に見つめる機会となったことがうかがえる。

個人志向性においては、男子には体験による変化は見られなかったが、女子に変化が見られ、女子が個性

化に向けて発達する突破口になる体験であったことがうかがえる。また、社会志向性は男女とも高まり、この体験により社会への適応が促進されている。

問題

もちろんこのような実証的な調査研究は、すべての教育的効果を測定するものではない。しかし、この体験活動によって、「生きる力」の諸側面の発達が促されることが明らかになってきた。

このような教育的効果は5年目の実施となった本年度でも見られるのか。教育的効果の経年的な変化を実証的に調査し、この体験活動に影響を与える要因やその在り方を見直すための研究が必要である。

目的

心の教育総合センターでは、この体験活動の教育的効果の経年的変化を検証することにした。この問題に実証的な分析をもって応えるため、心理学的調査を体験前と体験後に実施した。その調査には自己効力感と勤労観の質問紙を用いた。

本研究では、自己効力感、勤労観の体験前から体験後にかけての変化の分析を行う。そして、平成10年度との比較を通して、この体験活動がどのように変わってきたかの考察を展開することが中心課題である。その際、生徒・保護者・受け入れ先の感想文や教師等からの聞き取りを参考にした。これらによって、この体験の実施上の課題についての示唆を得ることができると考える。

2 方法

(1) 調査対象者

中学2年生5クラス140名(男子67名、女子73名)を調査対象者にした。対象校は都市部と田園部の中間に位置する全生徒数五百数十名の学校である。

(2) 調査内容

調査内容は自己効力感と勤労観である。自己効力感という概念は、もともとはバンデューラ(Bandura, A, 1977)^{※1)}によって提唱された社会的学習理論あるいは社会的認知理論の中核をなす概念である。調査には、桜井茂男³⁾によって開発された、自己効力感¹⁾の概念を構成した質問紙を使用した。その質問紙は、表1のように11項目からなり、5件法(選択肢が1,2,3,4,5の5つ)を用いたため合計点は55点満点である。なお、逆転項目は、数値を逆転(例:5→1)させて計算する。

表1 自己効力感

(番号の下線は逆転項目を示す)

- 1 何か計画するときには、その計画が必ず実現できると思う。
- 2 しなければならないことがあるのに、なかなかとりかかれない。
- 3 失敗しても、最後までやりとげることができる。
- 4 大切な目標があっても、なかなか実行できない。
- 5 最後までやりとげる前に、あきらめてしまうことが多い。
- 6 めんどくさいことでも、しなければならないことなら、やりとげるまでがんばる。
- 7 何かしようと決めると、すぐにそれにとりかかる。
- 8 新しく勉強しようとするのがむずかしそうにみえると、はじめからやろうとしない。
- 9 失敗すると、よけいにやる気がおきる。
- 10 物事がやりとげられるかどうか、心配である。
- 11 他人には頼りたくない。

(選択肢) 5 非常によくあてはまる 4 かなりあてはまる 3 どちらともいえない 2 ほとんどあてはまらない 1 まったくあてはまらない

岡田忠義・内藤勇次⁴⁾は高校生の勤労観¹⁾を測定するため4因子からなる質問紙(30項目)を作成した。この質問紙をもとに、小林宏⁵⁾は「勤労観—中学生用短縮版—」16項目(表2)を作成した。調査ではこの

質問紙を用いた。勤労観は4つの下位因子からなり、それぞれ4項目で、5件法を用いたため各20点満点である。

表2 勤労観—中学生用短縮版—

職場人間関係

- 1 私が就職して働くとき、仕事は最後までやりとげることが大切である。
- 5 私が就職して働くとき、職場の規則を守ることは大切である。
- 9 私が就職して働くとき、仲間と力を合わせて作業することは大切である。
- 13 私が就職して働くとき、職場の仲間と仲良くすることはたいせつである。

自己実現

- 2 私にとって働くことは、能力をのばし、個性を発揮することである。
- 6 私にとって働くことは、自分自身を向上させるためである。
- 10 私にとって働くことは、いだいている夢を実現させるためである。
- 14 私にとって働くことは、自分を磨くことである。

社会的自己実現

- 3 私にとって働くことは、社会に奉仕することである。
- 7 私にとって働くことは、仕事をとおして社会に貢献することである。
- 11 私にとって働くことは、世の中のためである。
- 15 私にとって働くことは、人々のためになることである。

社会的ステータス

- 4 私が就職して働くとき、給料がよければ自分の能力が発揮できなくてもよい。
- 8 私にとって働くことは、お金をえることである。
- 12 私にとって働くことは、余暇に遊ぶためである。
- 16 私にとって働くことは、生活を維持していくためである。

(数値は質問順番号、選択肢は自己効力感と同じ)

(3) 調査時期

1回目の調査は、平成14年5月の「トライやる・ウィーク」実施の前の週に、2回目の調査は実施後の週に行うように依頼した。調査は学級担任が行った。

3 結果

(1) 自己効力感

① 分散分析

表3は、自己効力感得点（55点満点）の平均得点・標準偏差を示したものである。

表3 自己効力感の平均得点・標準偏差(N=140)

	体験前	体験後
平均得点	34.03	34.50
標準偏差	5.52	5.76

体験前後の平均得点に差があるかを調べるため、分散分析^{註2)}を行った結果、時期の変化は有意（差がある）でなかった。

② 項目分析

続いて各項目ごとの体験前から体験後にかけての変化を見るため、ウィルコクソンの符号付順位和検定^{註3)}を行った。有意であったのは表1の以下の項目である。

- * 2 しなければならないことがあるのに、なかなかとりかかれない。
 ** 3 失敗しても、最後までやりとげることができる。
 (*: $p < 0.05$ **: $p < 0.01$)

項目2、3ともに得点の大きくなる方向に変化している。

(2) 勤労観

① 分散分析

表4は、勤労観下位因子得点（20点満点）の平均得点・標準偏差を示したものである。

表4 勤労観下位因子の平均得点・標準偏差(N=140)

職場人間関係		
	体験前	体験後
平均得点	17.19	17.22
標準偏差	2.18	2.33

自己実現		
	体験前	体験後
平均得点	14.84	14.97
標準偏差	2.91	2.91

社会的自己実現

	体験前	体験後
平均得点	12.70	12.63
標準偏差	2.69	2.91

社会的ステータス

	体験前	体験後
平均得点	13.11	13.70
標準偏差	2.45	2.50

体験前後の平均得点に差があるかを調べるため、分散分析を行った結果、職場人間関係、自己実現、社会的自己実現の時期の変化は有意でなかったが、社会的ステータスは有意($F(1,139)=12.79, p < .01$)であった。

② 項目分析

続いて体験前から体験後にかけての各項目ごとの変化を見るため、ウィルコクソンの符号付順位和検定を行った。得点が大きくなり、有意であったのは表2の以下の項目である。

- ** 6 私にとって働くことは、自分自身を向上させるためである。
 ** 4 私が就職して働くとき、給料がよければ自分の能力が発揮できなくてもよい。
 * 8 私にとって働くことは、お金をえることである。
 ** 12 私にとって働くことは、余暇に遊ぶためである。
 (*: $p < 0.05$ **: $p < 0.01$)

③ 下位因子から構成した勤労観

ここで、この調査の体験前のデータを用いて、勤労観とその下位因子を観察変数とする変数の構造を調べるため、構造方程式モデリング^{註4)}を行い分析した結果、図1のようになった。

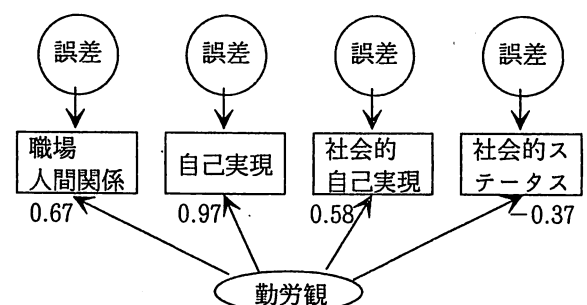


図1 勤労観の構造

矢印の左の数値は影響の強さを示す。社会的ステータスは負の値であるため、この得点が増加すると勤労観は減少することになる。

4 平成10年度との比較を含めた考察

ここでは本年度の調査結果の考察を行い、さらに平成10年度の調査結果との比較を試み、自己効力感と勤労観の変化についての推論を述べる。

(1) 自己効力感

① 体験活動による変化

体験前から体験後にかけては変化が見られなかったが、項目3「失敗しても、最後までやりとげることができる」に有意な変化が見られた。このことは、生徒のある行動に対して「あなたならできるのだ」と励まされ、その行動により多くの努力を重ね、成功体験を得た生徒が多かったものと考えられる。

ここで、過年度の調査²⁾によると男子より女子により大きな教育的効果が見られ傾向があるので、女子だけの変化を見ることにする。表5に女子の体験前後の平均得点と標準偏差を示す。

表5 女子の自己効力感の平均得点・標準偏差
(N=73)

	体験前	体験後
平均得点	33.30	34.25
標準偏差	5.75	5.85

分散分析を行った結果、体験前から体験後にかけての変化は有意 ($F(1,72)=4.57, p<.05$) であった。この結果から、女子にとって自分自身に自信をつける体験であったことがうかがえる。しかし、このことは男女によって体験内容に違いがあることを考えると、性差の問題として捉えることのできない要素を含んでいる。

② 平成10年度との比較

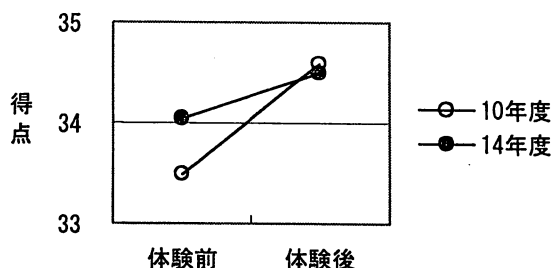


図2 自己効力感の変化

図2は平成10、14年度の自己効力感の体験前から体験後にかけての変化を示している。本年度の体験による変化を示す傾きは平成10年度のものより小さい。

バンデューラは、自己効力感を強める方法として「直接体験」「代理体験」「社会的説得」「生理的、感情的状態」を挙げている⁹⁾。そして、直接体験の質について、成功すら体験のみでは意味がなく、そこに忍耐・困難・つまずきが含まれている必要がある、と述べている。その意味では、成功体験が得られるという意味での学校での取り組みは進んだが、この体験活動において、忍耐・困難・つまずきを克服する面は少なくなり、自分自身の自信に繋がる体験は減少していく傾向にあることが考えられる。

(2) 勤労観

人が働く動機は、大きくは経済的動機（本調査では社会的ステータスに当たる、以下同じ）、社会的動機（職場人間関係、社会的自己実現）、自己実現動機（自己実現）に分けることができる。

① 体験活動による変化

社会的ステータスが体験前から体験後にかけて変化していることから、体験により、生徒が「人が働くのは経済的理由からである。」という気持ちを強く持つようになったことが明らかになった。

スーパー (Super.D.E,1957) ¹⁰⁾ は、人生を職業と発達という観点から、年齢に従って5つの職業生活段階を区分している。それによると、中学2年生は「成長段階の能力期」にあたり、希望の職業に必要な要件を考えたりする時期である。その意味では、経済的動機よりも自己実現動機の変化が望まれるところである。

自己実現に変化がなく社会的ステータスに変化があったことには、働くことに喜びを見出せないでいる現代の若者の仕事に対する考えの一側面が反映されているとも言える。しかし、項目分析により「私にとって働くことは、自分自身を向上させるためである。」に変化がみられたことは、一部この体験が自己実現動機に与えた影響も大きかったことを示唆している。

ところで、図1に示すように、勤労観は自己実現と正の相関があるが、社会的ステータスとは負の相関である。このことから、この勤労観が体験活動によって高まったとは言えないが、社会的ステータスの高まりがこの体験活動により獲得されたものであるとすれば、

このことを積極的に評価して、体験活動の成果として意味付ける視点が必要と言える。

② 平成10年度との比較

図3は、平成10、14年度の勤労観下位因子の体験前から体験後にかけての変化を示している。

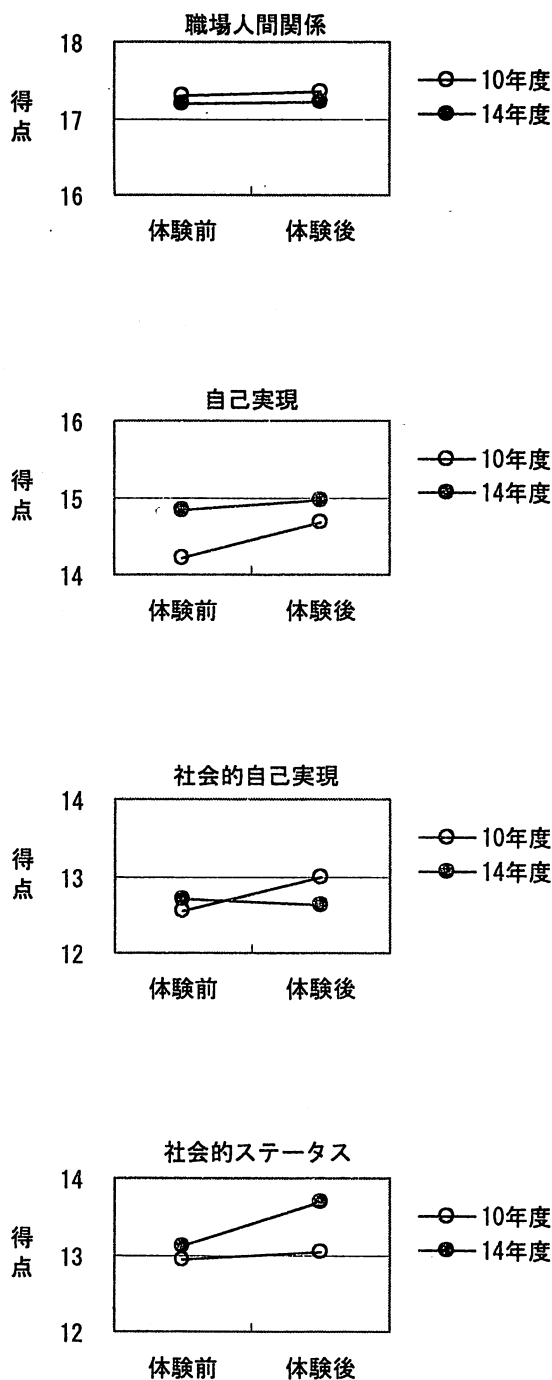


図3 勤労観下位因子の変化

職場人間関係

本年度、職場人間関係に変化が見られなかったのは、平成10年度と同様である。この結果は、日常的に中学生が友達関係に気がつかっており、職場における人間

関係の重要性を普段と同様な気持ちで受け止めていることを反映しているものと考えられる。常日頃からこのようなことを意識しているから、特に体験活動による変化は見られず、友達に気を使う中学生の姿は、5年前と変わっていないと言える。

自己実現と社会的自己実現

自己実現と社会的自己実現は、平成10年度には体験による変化が見られたのに、本年度は変化が見られない。人の自己実現動機は、職場における人間関係やその地位によってではなく、純粋には仕事そのものによって満たされるものである。報酬のような外的動機ではなく、仕事における能力の発揮や達成の喜びのような内的動機が満たされる必要がある。

自己実現に関する質問紙に回答する時、生徒は、受け入れ先で働いている人を見て、その働く姿勢からどのような印象を受けるかに多分に影響されると思われる。その意味では、仕事そのものに喜びがあることが見えにくくなり、生徒自身にとっては、能力の発揮のような内的動機が満たされる体験が少なくなっている傾向がうかがえる。

社会的ステータス

社会的ステータスは、平成10年度も変化していたが、その変化率は本年度の方が大きい。項目ごとの分析により、働くこと（とき）は「給料がよければ自分の能力が発揮できなくてもよい」「お金をえることである」「余暇に遊ぶためである」に変化が見られたことから、社会や家族を支える労働は必要であるが、自由に使える時間を多く持ちたいという意識の傾向が強くなってきている結果と言える。

親子で受け入れ先の開拓を試みた保護者は、感想文で「直接何ヶ所もの受け入れ先へ親子で足を運び、お願いしましたがなかなかいい返事がもらえず、トライやるの受け入れ先の方にも厳しい現状があるのが体験に行く前からわかりました」と述べている。この感想文に見られるように、不況の影響で受け入れ先となる事業所の数が伸び悩んでいる現状もある。この体験活動で、生徒が「働くことは経済的理由である」という気持ちを強く持つようになったことは、一部、不況による厳しい職場状況を反映している結果と考えることもできる。

5 今後の課題

今回の調査から、この体験が生徒に与える影響に経年的な変化が見られることが確認された。こうしたことの背景には様々な要因が考えられるが、体験内容、学校の指導という視点でこの体験の課題を提出する。
セレンディビティー

自己効力感⁶⁾は、女子生徒のみの検定では体験により高まることが実証された。このことは、男女によって選択した体験に違いがある（例えば幼児教育を選んだのは全員が女子である）ことから、体験内容により相当程度この種の教育的効果が左右されることを示唆している。そして、自己効力感の高まった体験は、生徒が受け入れ先で働く人や出来事から受けた影響は大きく、感動のある体験であったと想像できる。

牧場へ行った生徒は偶然、子牛の誕生や牛の大量脱走という事件を体験する。このような非日常のドラマにより、人間・社会・自然について新しい発見をして人は成長していく面がある。このように、当てにしていなかったものを偶然にうまく発見することは、感動を生む一要因になる。この、目的とすることでないことで大発見、大発明をすることを意味するセレンディビティー⁷⁾は体験活動の重要な要素である。体験活動には、偶然性という面が入りこむことが望まれる。

「厳しい」体験

ある受け入れ先は、アンケートに「働くことの厳しさをどこまで分かっていたらよいのか迷いました。」と答えている。このような「厳しい」体験にするかどうかは、自己効力感・勤労観の教育的効果を左右することがらである。実際の労働に近い「厳しい」体験活動では経済的動機の意識が高まると予想できる。

今村仁司⁸⁾は、近代における労働中心主義的人間論を考察し、労働における経済的動機に積極的な意味を見い出している。働くことの厳しさを知る体験活動は意味あるものと言える。

選択の自発性

受け入れ先を生徒自身が自己責任で選択することは、この体験活動実施上の1つの柱である。また、このことは体験活動を効果的なものにするための重要な要素である。しかし、一方ではどんな体験をするかによって教育的効果が左右される部分があり、そのことは調査結果にも反映されている。

これらのことを別の視点で考えると、受け入れ先選択の自発性は重要な要素であるが、体験内容によって教育的効果に差があるという観点からすれば、生徒が選択できる体験を絞ることも認められてよいと考えられる。「自発性は活動の要件ではなく活動の成果」⁹⁾ととらえることもできる。

引用・参考文献

- 1) 古田猛志・小林宏「地域に学ぶ『トライやる・ウィーク』の教育的効果に関する一考察」兵庫県立教育研修所研究紀要Vol.110(1999)(質問紙の説明は30頁)
- 2) 古田猛志・住本克彦「進路指導から見た『トライやる・ウィーク』の教育的効果」兵庫県立教育研修所研究紀要Vol.111(2000)
- 3) 桜井茂男「自己効力感が学業成績に及ぼす影響」教育心理研究Vol.35-2(1977)
- 4) 岡田忠義・内藤勇次「高校生用勤労観尺度作成の試み」日本進路指導学会第10回研究大会発表要旨収録(1988)
- 5) 小林宏「中学生の勤労観短縮版尺度作成の試み」兵庫教育大学発達心理臨床研究(2000)
- 6) アルバート・バンデューラ編『激動社会のなかの自己効力』金子書房(1997)
- 7) 澤泉重一『偶然からモノを見つけだす能力』角川書店(2002)
- 8) 今村仁司『近代の労働観』岩波書店(1998)
- 9) 中央教育審議会「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について(答申)」(2002)

注

注1) モデリングの理論およびその実際の提唱者。

注2) 平均値の差を分散(バラツキの程度を示す量)という統計量を用いて検定する方法。

注3) ウィルコクソンが開発したサイン・ランク検定で、符号と順位を利用する質的なデータの検定法。

注4) 直接観測できない潜在変数を導入し、その変数間の構造を明らかにする統計手法。

注5) 職業的発達理論の構築と関連の研究の世界的学者。また開発的カウンセリングにおける第一人者の一人。